

「自己理解」(総合科目)

## 自己のアイデンティティを求めて

今井重孝・黒川五郎・志賀邦瑞

### はじめに

青山スタンダード科目は、「理解関連科目」という名称に象徴的に示されているように、学問中心のカリキュラムを、社会や学生の要請を取り入れることにより、学生一人ひとりの将来の人生に役立たせることができるよう再編成するための基礎として構想されている。従って、学際的であることを目指し、複数のアプローチになじむことを目指している。そうした、人生に役立つように知識を体系化する仕事は、一人ひとりの学生にゆだねられており、それゆえにこそ、それぞれの学生がどんな人生を歩もうとしているかが、知識の体系化の中核となる。そのさい、一人ひとりがいかなる一生を送るのがその人の人生にとってふさわしいのか。自分の人生の使命は何か、という問いに見通しを持つこと、言い換えれば、それぞれのアイデンティティを確立することが大切となる。自己理解という科目が設定されたゆえんである。

「自己のアイデンティティを求めて」という本講義のテーマは、こうした自己理解科目の狙いを実現するにふさわしいテーマということで設定したものである。アプローチとしても、メルヘンを素材にした物語論的アプローチ、茶道に依拠した哲学的アプローチ、諸科学に依拠した人間学的アプローチの三つを提示した。

二年目から、最初の授業の折に、チャペルでオリエンテーションを行ったが、そこで、青山スタンダード科目の意味を説明すると、学生は、その意図に深く共感を示してくれたし、チャペルでの3人の講師による概要の説明は、学生の興味をいたく刺激するようであった。いくつか学生の感想をあげておこう。

「自己理解」(総合科目)

「どの先生方の講義も面白そうだった」

「とても興味深い分野だと思いました。自分の将来にとって役に立ちそうな気がしました」

「三つの題材それぞれにとても興味を抱きました」

「それぞれの先生方から、色々な視点でものを見ることを教えていただくのがとても楽しみです。自分のことはいつも主観的にしか考えられないけれど、この授業をきっかけに、様々な角度から自分のことが考えられるようになればいいと思います。」

「今日主なガイダンスを聞いてやはり自分の人生の計画について深く考える必要があると感じました。3人の先生のテーマはそれぞれが興味深く、授業が楽しみです。」

「今までこのような授業を受けたことがないので、これからの授業がとても楽しみです。12回の授業で、1回1回自分なりに考え新しい発見ができればいいと思います。」

「知識を頭に入れるだけでなく物事を深めて考えていけそうで、面白そうだと思いました。」

「自己理解とはとても深い学問だと思いました。これから自分の進路を決めていきたいので、この授業を通して自己をしっかりと理解し、自分にあった道を決めたいと思います。」

「どの授業もそれぞれ違った面白さがあり今から授業が楽しみです。それぞれ4回くらいずつしかないのが悔しいです。」

それでは、ここで、それぞれの各回の授業テーマを示しておこう。

志賀担当 小テーマ: メルヘンに現れた自己

第一回: 深層心理学(メルヘン解釈による)から見た自己実現

第二回: 四つの気質——心の中を探る

第三回: ふたつの自分——ユングの自我と自己の関係

第四回: メルヘンにおける個性化のプロセス——本当の自分を求めて

今井担当 小テーマ: 生きる叡智としての人間学から見た自己

第一回: ライフサイクルの中の自己

第二回: 社会の中の自己

第三回: 体と自己

第四回: 自己発見のプロセス

黒川担当 小テーマ: 茶道における自己読解の試み

第一回: 茶室の思考——青年期における自己創造のために

第二回: 臨床教育学におけるナラティブ(物語)・アプローチ

第三回: 侘の美学

第四回: “野生の思考”の回復を求めて

以下、各講師が授業を紹介する。

## I 自己理解「メルヘンに現れた自己」

志賀邦瑞

### 1. 心理的自立を自己検証する

まず受講生に「体の成長」と「心の成長」, 「社会的自立」と「心理的自立」という観点から数年前の自分と較べて成長しているか, 自立しているかを自己検証してもらった。「体の成長」「社会的自立」は数値化, 客観化されわかりやすいが, 「心の成長」「心理的自立」は理解しにくいものである。今回の授業の目的は「心の成長」「心理的自立」をいかに自分で把握し推進していくかである。そこで普遍的な物語であるメルヘン (Märchen) を読み, 登場人物に自分を投影して自分をより客観化, 対象化できるようにした。

第1回目にはグリムメルヘン「ホレおばさん」をとりあげた。あらすじはこうである。

主人公の女の子は実の父・母が死んで, まま母に育てられる。ママ母は実の

## 「自己理解」(総合科目)

娘はかわいがるが、主人公の女の子にはきびしい。毎日重労働をする。あるとき井戸場で血だらけになった糸巻きを洗うさい、誤って井戸に落としてしまった。ママ母は糸巻きを拾ってくるまで家に入れないと言う。女の子は思いあまって、井戸の中に飛び込む。

そこには地下の世界が広がっていてやさしいホレおばさんの下で勤勉に働き、やがて地上の世界に戻ってくる。その境界で女の子に金の雨が降ってきて、彼女は金に包まれる。それを見たかつてのまま母は虐げることができなくなる。

「成長」「自立」をテーマに次のような解釈をしてみる(物語の解釈には決定的なものがあるわけではなく、あくまでも解釈のうちのひとつであることを受講生に付け加えた)。主人公は冒頭できびしい現実の中にいる。守ってくれる親はもういない。しかしそれを嘆くのではなく、受け入れて一生懸命、自分のやるべきことをしている。地下の世界で母親がわりのホレおばさんに評価される。それが励みとなって、かつてきびしいと思われていた地上世界に戻っても生きていくことができる。

心理学者カール・グスタフ・ユングはメルヘン、神話などに現れる母なる登場人物をグレートマザーと名づけた。それは同時に個々人の心の中にある普遍的な母のイメージでもあると考えた。グレートマザーの特徴として、「ささえる、育てる、実らせる、愛する」要素があるがそれは善母として描かれる。他方「つかむ、誘い込む、呑み込む、憎む」要素は悪母として描かれる。人間は成人期にそこから自立していかななくてはならない。離れることによって自我が目覚める。しかしその分離の過程は痛みを伴うものである。

さて、グレートマザーを実際の母に限定せず、今まで自分を育ててくれた存在全体ととらえてみる。そのことによって心理的に自分がどのくらい自立できているか、自分なりの把握がしやすくなる。

## 2. 気質で性格を自己認識する

2 回目は気質論を取り上げた。紀元前 5 世紀のヒポクラテスに始まり、多

くの心理学者や哲学者が援用したいいわゆる人間分析であるが、ここでは特に思想家・教育者として知られるルドルフ・シュタイナーの理論を用いた。

まず学生に次に掲げる項目に思い当たるところはあるか自己チェックをしてもらった。

楽しいことが大好き。熱しやすくさめやすい。感情が豊か。まわりに左右されやすい。まわりに気を配る。悩むのは苦手。社交的。人なつこい。好奇心旺盛。クラスの人気者。想像力に富む。ユーモアや冗談が好き。しかし込み入った問題には首をつっこみたくない。とっつきやすいが、あてにならないこともある。さびしがりや。軽いうそをつく。落ち込んでも立ち直りが早い。ケセラセラ。…これらに思い当たるのは多血質の可能性が強い。

エネルギッシュ。決断力がある。まわりへの影響力が強い。白黒をはっきりつけたい。積極的。強い意志をもつ。感情がはげしい。カッとなりやすく怒りっぽい。気持ちの切り替えは早い方。まがったことがきらい。正義感がある。やると決めたことは責任持ってやろうとする。大変な問題にやりがいを感じる。頼りがいがある。おしつけがましい。味方も多いが敵も多い。うそは許せない。…これらは胆汁質。

沈着冷静だが内面は激しいことも。細かいところまで気を配れる。不満をためやすい。昔のことを憶えている。探究心が強く、物事をそのまま受け取らず、自分の考えで判断する。疑い深い。そのためすぐには行動しない。相手のいやな部分が気にかかる。友だちは多くないが、ひとりの親友とじっくりつきあう。非社交的で孤独、人間嫌いになることも。反面、人のつらい気持ちをわかってあげられる。細かい作業がきらいではない。悲観的。…これらは憂鬱質。

エンジンがかかるのは遅いが、やりだすと粘り強くやりとげる。食べたり、寝たり、休んだりが好き。ひとりでぼーっとする時間が必要。空想好き。気に入ると同じものを繰り返しやる。マイペース。話にも繰り返しが多い。穏やか。優柔不断で、気持ちを引きずることも。好きなことしか興味ない。はっきり意見を言わない。自信がない。計画を立てることができる。大器晩成型。平和主

義者だが、事なかれ主義でもある。…これらは粘液質。

ただし気質論は決定論ではない。変化をしていく可能性も少なからずある。また、ひとりの人間は以上の気質を4つとも持っている。どれが強く出ているかの問題である。

自己実現するには4つとも必要である。そのため気質をうまく使う「自我」を発展させることが肝心になる。

### 3. 無意識の自己を意識化する

3, 4 回目は心の全体像に領域を広げた。ユングは心の意識の中心を自我と呼んだ。さらに無意識の中心を自己と呼んだ。受講生にユングの理論をかいつまんで解説した後、今回は自我を定義するものとして次の要素を挙げた。「社会的意味や価値観を求める。学校、勉学、職業、特技、家族、友人、サークルなどで自分ができるもの」

自己の定義としては、「人生の意味や価値観を求める。内奥にあるもの。無意識。自分でもわからない何かに突き動かされる体験。なんとなくかなしい。満足しない、など。内面を満たすことが重要。それがないと、調子が出ないもの」を挙げた。

その後でメルヘン「ロバの王子」を取り上げた。

あらすじ: 王と王妃の間に待望の子どもが生まれたが、ロバの姿をしていた。王妃は嫌うが、王は跡継ぎとして大事にする。ロバの王子はすくすくと育つ。明るい性格。楽師に音楽を習いプロ級になる。あるとき泉を覗きこんだときに、自分がロバの姿だとわかり、ここにいられない気持ちになり旅にでる。ある城の門で琴を弾く。その国の王様に認められ、大事な扱いを受ける。好きになった姫と結婚。ふたりでいるときは夜はロバの皮を脱ぎ、立派な若者の姿になる。そのことを姫は父に言う。父は次の晩、見張りをしていて、王子が脱いだロバの皮を火にくべて燃してしまう。王子は悲しむが、王は大丈夫だ、このまま王国を引き継いでほしいと言い、人間の姿として幸せに暮らす。

ロバの姿を自我，王子の姿を自己，母を「自我しか見ない存在」，実の父と義理の父を「自己を理解してくれる存在」，音楽を自我の獲得した能力，姫を「本来の自分を出せる相手」と解釈した。その後受講生にはそれらに思い当たるものがあるかを自問自答してもらい，そのことで自己認識を深めていった。

#### 4. 学生の反応

学生の感想をいくつか取り上げる。「授業中，自分に向き合える時間を過ごした。今までそのようなことはしてこなかった」「とても考えさせられる講義だった」「(講義の内容は)自分に当てはまることが多々あった」「自分を見つめることができた」「自分は親に気づかずに依存していることがわかった。これからは親を支える行動も意識的にしていきたい」「気質論でまさに自分のことを言われている印象を受けた」「自分はなぜ大学に通っているのか，悩んでいたが，解決のきっかけをつかめた」「自分でもわからない無意識の自分を感じていたが，それが納得できた」「自分も簡単なことからでも，自己を客観的に見て改善していきたい」

否定的な感想として「4つの気質論で心を分けるのは不十分」といった意見が各教室数名いた。

## II 生きる叡智としての人間学から見た自己

今井重孝

私の担当部分では，人間が人生行路を歩む上で役に立つ知識という観点から講義することにより，それぞれの学生が，己の歩むべき人生行路を発見し，自己のアイデンティティーを発見する手助けをすることを目指している。

### 1. ライフサイクルの中の自己

最初の授業では，まず，大学一年生という年齢が，その人のライフサイクルの中でどんな位置を占めているかを理解してもらうことを狙っている。

「あなたの最も早い時期の記憶は何歳ころのものですか？」という問いで授業

## 「自己理解」(総合科目)

を始めると、平均的に3歳という結果となる。なぜ3歳なのか。自我の第一の目覚め(身体的な自我の目覚め)の時期だからだ。というところから自己の発達を回想し、次に9歳における第二の自我の目覚め(心理的な自我の目覚め)の時期を回想してもらう。9歳の頃には、「自分は本当の子どもではないのではないか」、鏡が怖い、人が隠れているのではないか、孤独になるなどの心境になりやすいのであるが、そうしたことがなかったかどうか思い出してもらう。その後、12歳から20歳の間は、エリクソンのいうところのアイデンティティの確立の時期であるが、この時期は、モラトリアムにより次第に伸びてきており、まさに大学生の時代は、アイデンティティの確立の時期であり第三の自我の目覚め(精神的な自我の目覚め)の時期であることを説明する。

その上で、0歳から21歳までは、身体の発達の時期であり、この頃に背丈の成長は止まることを指摘する。現代社会は、身体の成長が終わると、体は次第に若さを失い老化していくという、春→夏→秋→冬というライフサイクル観を持っていることを説明する。だいたい学生は、こうした考え方になじんでいる。そこで、17世紀の科学革命以前の世界では、そうでないライフサイクル観が支配的であり、年齢が重なるに従って、人間は発達し続けると考えられていたことを紹介する。こうした考え方によれば、たとえば、21歳から42歳の間は、心の発達段階であり、利己心を克服し隣人愛を身につけていく時期であるとされ、42歳から63歳までは、知恵の発達する段階であり、長い人生経験を濃縮した生きる叡智が熟成する時期であると考えられている、ことを説明する。こういう見方にはじめて触れた学生たちは、若さを失う焦りの気持ちから解放され、未来に希望を抱くようである。

さらに、古代の叡智においては、生まれる前の世界、死んだ後の世界についても考えられており、たとえば、子どもは親を選んで生まれてくると考えたり、自分が現在この時代に日本に生まれたことも必然性があると考えたりする、ということを紹介する。この考え方を一つの物語として知ると、自分のアイデンティティや生きる使命を見出す上で、ひとつの有力な手がかりとなるということ、なんとなく感じ取るようである。

最後に、大学生の4年間の短いサイクルでの変化に依拠してとりわけ入学期の状況について紹介する。入学期は、1. 今まで慣れ親しんだ生活から離れ、新しい学生生活へと移行する時期であり、2. 入学に伴う新しい状況に入る課題と、入学以前から抱えてきた課題に直面する時期であり、3. 入学後の高揚感と落ち込みが生じやすい時期であり、4. すべてを自分で決定することが求められる時期であり、5. 新しい生活にうまく適応できない場合には、過去になじんだ習慣や友人関係への逃避が生じやすい時期である(以上、鶴田和美著「大学生とアイデンティティ形成の問題」『臨床心理学』第二巻第六号 727 頁)。こうした指摘をすると、とりわけ、下宿生の場合、悩んでいるのは自分だけでなかったと安心したというコメントを寄せてくることが多い。

## 2. 社会の中の自己

二回目の講義では、人間は、通常ロビンソンのように孤島で生きることではなく、社会の中で生きていかざるをえないわけなので、社会の中の自己、というテーマを取り上げている。「社会は、個人からなるのではなくコミュニケーションからなる」という最新の社会学の知見に基づいて、役割を媒介とした「社会化」過程について話をしている。その際、「サカキバラ」事件など、近年増加している、若者による凶悪犯罪をどう見るかというテーマとからめて、コミュニケーション能力について話すことにより、関心を深める努力をしている。

家庭における第一次社会化と学校や地域社会における第二次社会化を通して役割の取得が進むわけであるが、アイデンティティの確立との関係で言えば、役割というのは、代替が可能であるのに対して、アイデンティティは代替が利かない唯一性を持つことに気づかせる。つまり、多元的な役割への帰属は、アイデンティティ確立の手がかりにはなっても、ある役割自体がアイデンティティとなるわけではないということが大切で、まさに、役割とのズレこそが真の自己を発見する手がかりとなるのである、というわけなのだ。では、アイデンティティを役割で支えることができないとすると何がそれを支えてくれるのであろうか。それは、「宇宙の不思議」との接触であり、「すばらしいもの」と

の接触であり、「大自然」との接触であり、「当たり前が含む不思議さ」との接触である。他人に何か言われても動じないアイデンティティは内側からの確信に支えられているものであり、この確信は、「大いなる感動」の経験により与えられる可能性が高いのだ。

こうした話をする、学生たちは、コメントで、コミュニケーションの大切さ大事さに改めて気づくとともに、感動体験を報告してくれたり、感動体験を求めたいとの希望を述べたりすることが多い。

### 3. 身体と自己

「不思議」との遭遇を体験するひとつの方法として、普段は当たり前と思っている身体が、信じられないほど賢いことを、免疫システムを手がかりとして示すのが、三回目の講義の目指すところである。それにより、アイデンティティを底から支える体験をしてもらおうというわけである。種痘やワクチンから出発して免疫に入り、臓器移植と免疫の関係にも触れた上で、インフルエンザを例として免疫の機構の話を簡単にしたうえで、免疫をめぐる不思議についていろいろ指摘をする。免疫が自己と非自己をいかにして区別しているのか、胸腺でつくられる免疫関連の細胞がいかに厳選され選別されて胸腺から出て行くのか、細菌やウィルスの種類は、膨大なのになぜ免疫は、それぞれに対応した抗体を作り出すことができるのか、細菌の種類はどこでいかに記憶されて、同じ菌が入った瞬間作動できるのか、などの作動の不思議さに触れる。抗体を上げるのに人体は、遺伝子組み換えを行っていることを利根川進が発見し、ノーベル賞が授与されたことを紹介する。それにとどまらず、さらに、人間に益となる腸内細菌は敵とみなされないで生きていることのも不思議(いったいどうやって、免疫システムは、益になる菌と害になる菌を区別しているのか?)、胎児は母親の免疫によってなぜ攻撃されないのか? さらに免疫システム全体の動きはいったい何がコントロールしているのか? といった疑問に進む。免疫学の大家である多田富雄が、これをスーパーシステムと名付けたことを紹介し、無意識の世界の賢さに気づき、自分という存在は、意識化した自己よりはるか

に賢いことを学ぶことを目指している。

全員が、身体の不思議を感得できるわけではないが、少なからぬ学生がからだの不思議さに感動したコメントを寄せている。

#### 4. 十牛図に示された自己発見のプロセス

禅の世界で有名な十牛図という 10 幅の絵がある。通常は、座禅による意識の深化の過程として使用、解釈されているが、この絵は、自己の意識の深化の過程、アイデンティティの深化の過程としても解釈が可能なのである。1. 尋牛: 若者が牛(高次の自己)を探し始める, 2. 見跡: 牛(高次の自己)の足跡を見つける, 3. 見牛: 牛(高次の自己)を見つける, 4. 得牛: 牛(高次の自己)を捕まえる, 5. 牧牛: 牛(高次の自己)を手なづける, 6. 騎牛帰家: 牛(高次の自己)に乗って家に帰る, 7. 忘牛存人: 牛(高次の自己)は消滅し人だけがある(高次の自己が低次の自己(若者)と一体化する), 8. 人牛俱忘: 牛も若者もいなくなる(宇宙との一体化), 9. 返本還源: 元に返って再び自然を見る(自然の中に自己を見る), 10. 入鄺垂手: 高次の自己と一体化した人物は町に出て新たに次の若者を感化する, という十の段階を, アイデンティティの探索過程として説明するわけである。その結果, 学生は, たとえば次のようなコメントを寄せてくれる。

「十牛図に感動した。高次の自己を牛にたとえてそれを探すところから始まって, 次に追い, 獲得する。すごくわかりやすく私たちの自我の確立するまでの道のりを書いているように思う。牛を自分のものにするのは決して容易なことではない。それをつかまえるまでも, 捕まえた後とどめることも困難である。私たちのアイデンティティもそうである。私たちは, その困難を乗り越えたとき, 真の自己に出会えるのだ。」

「十牛図を書いた人物の思考の深さに感嘆せざるを得なかった。高次の自己と低次の自己との対立は我々が乗り越えるのが一番難しいのではなかろうか。私は, 今まで, 自己理解, いわゆるアイデンティティーの確立というのは得牛の時点で終わるものであると考えていた。しかし, 世界との一体化, そして絶えざる努力により得る悟りこそ自己理解, 自己獲得であるのだろう。まず我々に

## 「自己理解」(総合科目)

必要なのは尋牛の段階なのだ。私自身、今までのままでいいのかという問いは持ってはいるがその思考が他人を基準に自己を見てしまっているのではないかと疑問も感じる。今の社会では何もない中での思考というのはとても難しく高度である。自己を理解するために他者の存在を軽視せず自分とは何かという疑問を持って答えを見つけていきたいと思った。」

四回の講義を通して、ライフサイクルの中に自己を位置づけた上で、多元的役割取得の必要性和またそれとのズレからのアイデンティティの探求の可能性を知り、アイデンティティを支える「すばらしいものに出会った感動」をたとえば、身体の不思議、免疫の不思議を経由して感得し、最後に、十牛図に表象された自己探求の道筋を己のアイデンティティ探求の導きの糸とすることを目指して講義をしているわけだが、四回の講義後二週間後に提出してもらうレポートを読む限り、かなりの学生が、自己理解を深めつつある印象を受けている。

## III 青山スタンダード総合科目『茶道からの自己理解』を担当して

黒川五郎

この度、私は、青山スタンダードの人間理解関連科目における「茶道からの自己理解」という極めて哲学的色彩の濃いパートを担当することになった。私の専門は教育哲学であるが、一言で言えば、この教育哲学の立場から、日本の伝統文化である茶道を鏡として、聴講者の自己理解をサポートするというのが、この講義の主な目的であるということになるだろう。

特に、ビデオ・プロジェクターや DVD 等の AV 機器を多用して、茶道の儀礼や神話、或いは、ダリの絵画や J・コクトーの映画、さらに、量子物理学や数学等に至るまでの事例を解説し、学生の興味を呼び起こすように努めるとともに、下記に述べた講義の趣旨の解説を試みた次第である。

さて、このような問題意識は、例えば次のような問いの形にも結実する。すなわち、——現代の複雑化した飽和状態のシステム(制度・組織)のなかで、自

由なスピリチュアリティを求める人々が、いかにしてその本来の自己(の野生)を回復することが出来るのか——私は、このような問いかけに対して、アテナイのアゴラ(広場)での市民との対話で活躍したソクラテス、或いは、ルネサンス期以後の17世紀のフランスで、そのソクラテスの再来ともいわれたルネ・デカルト、そして、自然への回帰や感性の解放を掲げてロマンティズムを復興し、後のゲーテやシュタイナー等にまで影響を与えたルソー以来、今日に至る臨床的な教育哲学の立場から、議論を進めてきたつもりである。

ところで、このような課題に対しての学生の反応は、おおむね良好であったといっていいと思う。もちろん、これはこれまで独自に私が探求を重ねてきた哲学に基づいた講義なので、中には反発を感じる学生もあったようだが、「最近流行の健康志向の波に乗り後れないために、例えば体を作ることも大事かもしれないが、将来この国の市民社会の担い手となる以上、その前にここで‘頭も作って’おくべきではないのか?’という私の問いかけに対して、共感する学生がかなりあったのも事実である。

講義に際しては、毎回アンケートをとったので、聴講者が感じ取ったリアルな反応を読み取ることができ、今となっては私自身にとっても一つの貴重な資料となっている。中には、それまで未体験<sup>なま</sup>のいわば生の、或いは、“真水の”哲学とでもいうべきものに接して、はじめは戸惑いつつも、最後には感銘すら感じとったらしい学生の有様を、はっきりとトレースすることができるものもあった。

他方、特にわたしの考え方に満足し切れなかった学生は、それを批判的に摂取して、いずれはそれこそ自分で自分自身のための哲学を作らなければならないことになるかもしれない。私の哲学が、少なくともその踏み台としての役割をも果たせたとすれば、光栄であるのだが。

しかし、だれもが哲学の専門家になるというわけではないのは明らかだし、また、そのような哲学的探究に時間をさく暇のある人間がそれ程多いということも実際には有り得ない。そこで、大学時代の初期に、人間の頭脳をいわばコンピューターに見立てたとすれば、そのためのオペレーションソフトとでもい

うべきものとして、自己理解と称する以上、まさに身近な切実な問題から説き起こしたコンパクトな哲学を、短期間に導入する機会を提供できたとすれば、彼らにとっても意味があったといえるのではないだろうか。

それではここで、この講義の概要について簡単にまとめてみよう。それは、内容的に言えば、かつてソシュールや R. バルト、レヴィ・ストロース等が探求した、人間の言語や神話、そして、儀礼等に関わる普遍的な精神構造と、その更に下層に位置付くものとしての潜在的な深層意識の領域、即ち連想や想像力の問題との繋がりを、今日の構造主義・記号論の立場から追求したものであるとも言えるのだが、以下においてその要旨を略述しておこう。

1. 宇宙の縮図としての茶室での ホリスティック 総合セラピー・・・宇宙 = 自己 + 他者

最近はやすらぎを求め、自分を見つめなおしたいという理由で、お茶を始める方々が徐々に増えてきている。現代のビジネス社会におけるストレスが、このような新たな癒しを求めるトレンドを生み出しつつあるのだとも言えるだろう。

ところで、この今日の精神的危機にも相通じる、戦国時代の激動の世相の中で、かつて利休は、信長や秀吉などの武將を、自らのミクロコスモスともいべき小間の茶室に招き、一期一会の癒しの時を演出していたのである。

例えば、現存する利休作の唯一の茶室として有名な山崎の待庵は、二畳席であり、侘びの極致とも言われているが、よけいなものを一切廃して主客が対座するその静謐な空間で茶を喫することが、本来、「宇宙は、自己と他者からだけ作られている！」というこの宇宙の哲学的本質を、はからずも浮かび上がらせ、個々人とその宇宙とのつながりの回復を促すのである。この利休の試みを、現代の視点からは、五感を動員した総合セラピーとして解釈することも可能であろう。

さらに、茶会では、このような癒しの雰囲気の中で、茶碗や棗などの芸術的な工芸作品等を鑑賞 (appreciation) する。その時にこれらの作品との“出会い”をきっかけとして、それが来訪者にとっての様々な連想や想像力の呼び水とな

り、或いは、その想像力が“交差する”(= ウインド・クロッシング winged crossing: 有翼交差)ように道具を取り合わせる時、ここに本来の意味での侘びエステティクスの美学が成立することになるのである。

この美学は、また構造主義以降の現代の哲学者が追求してきた神話の論理、もしくは“野生の思考”の発露の結果とみなすこともできる。それは、ルソー以来の自然への回帰を求める教育学の根本テーマでもあり、この自然界＝宇宙の生命の流れに回帰するとき、真の自己の創造(あるいは、創造性の回復)が可能になるのだともいえるだろう。

## 2. 自己と他者、そして、テキスト茶道具との出会いの場としての茶室

さて、幕末の大老: 井伊直弼が、“一期一会”という概念を用いて、人それぞれに固有な人生の出会いの過程(= 実存)の中で、自己探求を果たす場としての茶の湯に言及していることも有名である。

茶道が我々に教えてくれる第一の知恵というのは、人生はこの宇宙における自己と他者との“エンカウンター出会い”の過程であり、また、その出会いを通して“自らを創造してゆく”いわば自己創造のプロセスでもあるということである。しかし、現代の産業社会では、他者とのかわりが表層的になり、自己の目的達成の手段として他者を利用しがちで、そのかわりが一定の手続きの機械的な遂行にオペレーションなってしまう(= 操作)。

一方、一期一会である人生の出会いの中で、他者を単なる操作の対象としてみなすのではなく、その言葉としての半面に気づき、他者の存在意味を(いわば、自己に対しての宇宙からのメッセージとして)理解できるようになるときもある。例えば、絵画や音楽、演劇、舞踊等の諸芸術ジャンル、そして、ヘアースタイルやモード、身振り等、すべての文化の諸領域、さらにゲノムや自然景観等にいたるまで…すべてが、言葉(記号)でもあるのだ!

例えば茶室で出会う茶道具の例を取れば、それらは同時に一種の独特な言語、或いは、あたかも暗号でもあるかのようにして、鑑賞するお客に対して、何か或るメッセージ(= センス意味)を示唆しているのではないかという印象を、まさに茶

室で道具を“拝見”している時などには、きわめて生じやすくなるのである。

3. 危機におけるシンクロニシティの発現——人は実存の危機に陥った時に、潜在していた様々な可能性(≡連想)を<sup>シンクロ</sup>共時化(=交差)して、新たな神話を創出する！

ところで、我々の人生では、特に順調に悩むことなく様々な意思決定がスムーズに行われ、氷上をすべるスケーターのように、体験、すなわち、日々の自己選択(=実存)が流れてゆく時と、一方、何をやってもうまくゆかないで行きづまり、悩み苦しむ時(=危機)がある。そして、このような状態の時にこそ、その悩みを解決するためのアプローチの一つとして、様々なセラピーが求められることになる。

すなわち、それ以前から慣れ親しんでいた日常(=実存)における通常の手段が、もはや功を奏しなくなってしまう危機的な事態においてこそ、これまでの経験や、或いは、これからの未来の可能性が、いわば同時に生起する(言い換えれば、構造化する)ようにもなるのである。私がかねがね提唱しているウインド・クロッシングの真の有効性が発揮されるのも、まさにこのような場面だといえるだろう。

例えば、末期<sup>まっご</sup>の時には、子供時代からの今までの人生が、走馬燈の如くに繰り返されるとよくいわれる。これも、時間軸にそって順次ヴィジョンが展開するというより、人生の最後の刹那という生体にとっての実存の危機に、つまり、その一瞬にすべてが同時に生起し、再体験(=再構造化)されるということではないだろうか。

神話の場合も、単に古い時代を物語る、ただの昔話というわけではない。捉え方によっては、前の例と同じく、旧石器時代から新石器時代への人間社会の変革——いわゆる新石器革命——に対応して、そのような旧システム(すなわち、旧石器時代の<sup>ホルド</sup>群をなして狩猟・採集生活をしていた状態)から、新石器時代の土器作りや機織り、そして、農耕・牧畜などが広く行われるようになる、いわば社会・生活システムのドラスティックな転換期に、その転換を促すべく

して出現した一種の“同時生起的”<sup>シンクロニシティ</sup>な認識であると、考えることもできるかもしれない。それは、これまでの人類史において、産業革命をも凌ぐ最も大きな変化だと言われている“危機”<sup>クリティック</sup>に際して出現したものであり、まさに世界に対しての人間の思考や感性、想像力を総動員した、その同時的な発露の結果だったとも言えよう。

茶道において、伊井直弼等により「一期一会」と名付けられた茶道具や他者との出会い<sup>エンカウンター</sup>が生まれるのも、結局、このような人間精神の奥に潜む潜在的な“共時構造”が、発動するようになるからではないだろうか。そして、この同じ状況を、かつて心理学者の C. G. ユングや量子力学を開拓した W. パウリは、シンクロニシティ(同時生起: 共時性——例えば、心に思い描いていたイメージが、実際に現象化すること)としても、捉えていたわけである。

#### 4. ウインド・クロッシングの簡単な事例

それでは、ここでこのようなウインド・クロッシングの事例を述べてみることにしたい。それは、構造主義のレヴィ・ストロースの二項対立<sup>デジタル</sup>にもとづく神話論理の基本定式(= 野生の思考)を参考にして、新たにアレンジ(アナログ化)したものともいえるのである。

——まず、自分の出会った芸術作品の構成部分や、こだわりを持ち続けているいくつかの言葉から、自由に連想を展開してみる。その後で、連想の源になっている部分と、それらからの連想を交差して新しいイメージを作りだし、それをモチーフとして、自由に詩や神話的な物語の創作を試みるのである。(詳しくは、拙編著『ティー・セラピーへの招待』(川島書店)の p. 9 以降を参照していただければ幸いである。)今は、以下に簡単な事例の一つ挙げておくだけにとどめたい。

たとえば、ここで茶道から少し離れて、読者にとってわかりやすい例の一つとして、中島みゆきのヒット曲『地上の星』と、宮崎駿の『天空の城ラピュタ』を例にとって、この考え方を解説してみよう。

NHK の“プロジェクト X”の主題歌としても有名な『地上の星』という歌

「自己理解」(総合科目)

は、なにかとても神秘的な雰囲気をもつ曲名であると誰もが思うのではないだろうか。本来であるならば、星は天上に輝くべきものであるはずだからだ。一方、では反対に、地上にあるものとして、どのようなものが通常連想されるだろう。例えばビル、山、東京タワーなど、何でも良いと思うが、今そのような候補の一つとして、日本やヨーロッパの中世の大地に聳え立ち、そのシンボルでもあった「城」を取りあげてみる。そうすると、次のような図式を描くことができる。

地上 —————→ 城

天上 —————→ 星

さて、私が試みているウインド・クロッシングというのは、このような通常の連想に終わることなく、次の段階で、この二つの連想を下のように交差させるというものである。

地上 ———→ 城

天上 ———→ 星

こうすると、中島みゆきの曲のモチーフとなる「地上の星」というイメージが新たに合成されるということは、すぐに御理解いただけると思う。

なお、この場合の副産物として、実は宮崎駿のアニメとして有名な『天空の城ラピュタ』のモチーフになった「天空の城」というアイディアも、天「空」と天「上」という漢字での表現こそ違おうとしても、もうひとつの交差の結果として生み出されていることが、容易に見てとれると思う。このように、私の言うウインド・クロッシングというのは、一種の交差的な連想法とも言い換えることができるかもしれない。

その他、例えばギリシャ神話のケンタウロスと巨匠 J・コクトーの映画『オルフェ』に出てくる上半身が馬で下半身が人間であるような登場人物の場合にも、同様に交差的な連想が作用していると考えることができ、上記の交差的な図式が適応できるのである。ちなみに、参考書として用いた拙著では、この両

者を写真で比較することができるようになっている (cf. p. 11)。

なお、拙著では、他にも様々な興味深い事例を列挙しておいたので、ご一読頂ければ有り難い。それらの中でも、レヴィ・ストロースが『神話の論理』の中で参照している南米：ティンピラ族「火の起源の神話」では、やはり同様な野生の“交差的”思考が発露して、このような料理の火の起源をめぐる神秘的なストーリーが成立した有様を見て取れることを、特に付け加えておきたい。

以上、簡単に内容をまとめてみたが、結局私は、茶室でティー・セラピーを実践している立場から、たとえば今日の学校教育を眺めてみた時に、ややもすれば無味乾燥に成りがちな教室に押し込められている生徒や学生達にも、茶室のあの風流な癒しの雰囲気을いくらかでももたらすことができればと考えてきた次第なのである。とにかくも、あの茶道具を取り合わせて、一つの物語を構築するための茶室内の教育空間が、無言のうちに語りかけてくるセラピューティックなメッセージ、すなわち、そのような茶道を中心とするわが国の伝統文化に秘められている“侘び”という名の心やその美学のエッセンスを、この講義を通して、幾らかでも表現できたとすれば幸いである。

最後に、一言だけこの講義の一連の議論から帰結するいわば現代の定言命法とも言うべき命題をにかけて、結びの言葉としたい。——“宇宙の生命の流れ (即ち、宇宙の自己創造のプロセス)の一環としての、真の自己を創造せよ!”

#### IV おわりに

三人の担当者の中で、密度の濃い話し合いを持つために、自己理解の授業が開始される前に、各回ごとにそれぞれがどんな話をするかを報告しあい、意見交換した。お互いに、ほかの二人が何を話したか、あるいは何を話す予定かを把握した上で、それぞれが授業に臨んだ。前期は、約 600 人、後期は、300 ないし 400 人という形で 3 年間、合計 3000 人程度に、我々の自己理解の講義をする機会があったわけであるが、オリエンテーションの方法、評価の方法、出席管理の方法など、改良を加えることによって、三年目は、例年になく手ごた

## 「自己理解」(総合科目)

えが感じられたという印象を持っている。もちろん、教育の成果は、すぐに出るものではないわけなので、卒業後、あるいは、10年後、20年後においても、講義で聞いた内容が時に思い出され、さらに自己理解を深める機会が増えることを願っている。我々の試みが、多少なりとも、これから総合科目を担当される諸先生のご参考になれば幸いである。